

EVI論文

日本語「の」と中国語「的」の対照研究

－ 「N+の/的+N」を例として －

辛 奕羸

要 旨

連体修飾をする日本語の「の」と中国語の「的」は似た機能を持つので「N+の+N」と「N+的+N」は対応する場合が多い。ただし、対応しない場合もある。それは認知や前言語の段階における相違、言語表現での重点化の表現に相違があるからである。日本語の「の」の使用は前言語の段階で決まるが、中国語の「的」の使用・不使用は言語の段階で決まる。重点のありかを定めるのが言語段階だからである。また、中国語では「的」のない「N+N」の形式があるが、これは重点化のない形式といえる。

キーワード： の, 的, 認知, 前言語, 対応, 非対応

1 はじめに

連体修飾をする日本語の「の」と、中国語の「的」は、ともに構造上の2つの名詞をつなぐ機能がある。しかし、両者には対応する場合と対応しない場合がある。

対応する場合 日本語でいう「木のテーブル」は、中国語でも「木头的桌子」と言える。このとき、「の」も「的」も、構造上にある「木、テーブル」、「木头、桌子」をそれぞれつないでおり、「木、木头」が「材質」であることの意味を伝えている。

対応しない場合 日本語では「日本語の先生」のように、「の」でつなぐ必要があるが、中国語では「的」が使えない。すなわち、「*日语的老师」とは言えず、「日语老师」となる。

中国語の「N+N」 中国語には、「N+的+N」の構造とは別に、「N+N」の構造がある。日本語で「木のテーブル」と言うとき、中国語では「木头的桌子」のほかに、「的」のない「木头桌子」がある。日本語で「*木テーブル」とは言わない。

本論文では、日本語構造伝達文法の構造図を使って、認知過程の面から、日本語の「N+の+N」と中国語の「N+的+N」、「N+N」の類似と相違を明らかにする。

2 認知と言語の関係

2.1 認知が言語を生む

言語は人間の認知と離れがたく結びついている。認知過程を通さない言語は存在しない。認知の結果を具体化したものが言語であるといえる。（ここでいう言語とは、文や句として表現された言語記号を指す。）

2.2 認知から言語への過程

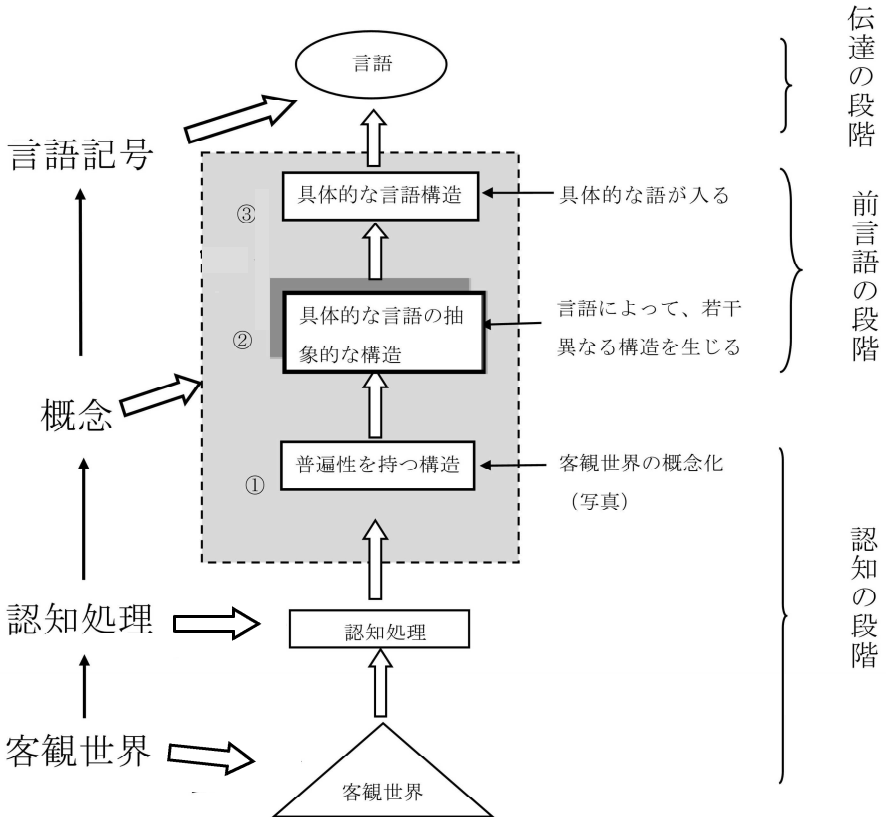
趙艳芳（2000）によれば，人間の認知は次のような過程により言語になる。

客観世界 → 認知処理 → 概念 → 言語記号 （図1参照）

つまり，「客観世界」が「認知処理」され，「概念」が生み出される。生み出された「概念」が「言語記号」になる，ということである。

日本語の「の」と中国語の「的」を対照する本稿においては，ここに示された過程の，「概念」の段階を，①②③の3段階のものとして捉えたいと考える(図1参照)。

「概念」の段階を3分割するのは，「の」と「的」が，①の段階では普遍性があるものの，②③の段階で異なりを見せるからである。さらに，日本語の「の」の使用は③の段階で決まるが，中国語の「的」の使用・不使用は，その③段階では決まらず，そのあとの「言語」の段階になってはじめて決まるからである。



図中の太矢印(⇒)の左側が趙艳芳(2000)によるものであり，右側が筆者による。

図1 客観世界の認知から言語に至る過程

図中の下方にある「客観世界」から、順に上に向かって説明する。

[1] 【客観世界】の段階

例えば、ここに下図のような物体があるとする。これが客観世界での事象である。人間の意識はまだ物体を何として捉えていない(図2参照)。

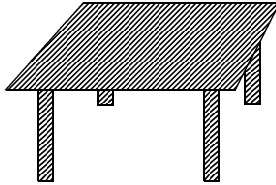


図2 客観世界での物体

[2] 【認知処理】の段階

人間の意識は、ここに物体があることを認知する。それが何であるかは、まだ認識がないが、物体の形状・質感などは直感的に捉える(図2参照)。

[3] 【概念①】の段階

あるがままを意識に取り込んだレベルである。比喩的には、この物体を写真に撮ったような段階である。まだはっきりした概念にはなっていないので、この段階では特定の言語の形態をとっておらず、「物体認知」も「構造」も普遍性を持っている。

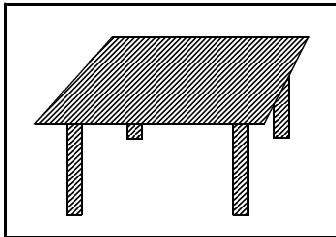


図3 写真に撮った物体

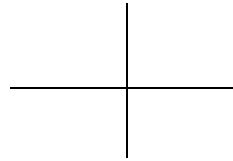


図4 概念未定の形式だけの構造

[4] 【概念②】の段階

この物体を概念として捉えようとするのがこの段階である。物体が何であるか、材質が何であるかを明らかにしようとする。しかし、「テーブル」や「木」は直感的なままであり、まだ語にはなっていない。構造には言語の特質が現れる。「具体的な言語の抽象的な構造」の段階である。

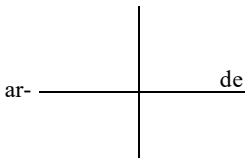


図5 日本語の概念②の段階

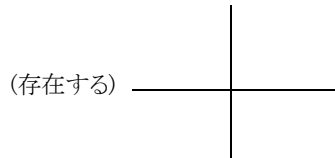


図6 ある言語の概念②の段階

[5] [概念③]の段階

概念が「語」という姿になり、構造が完成するのがこの段階である。

日本語話者なら、物体を「テーブル」と捉え、材質を「木」と捉える。中国語話者なら、それぞれ「桌子 zhuo zi」, 「木头 mu tou」と捉える。構造は下図のようになる。

「具体的な言語構造」の段階である。

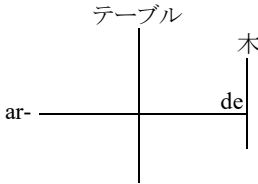


図7 テーブルは木である

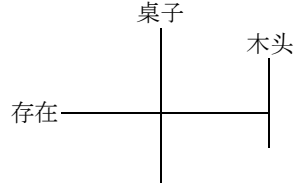


図8 桌子存在木头

構造が確定したこの段階で、「テーブル」「桌子」を修飾して表現しようとするれば、日本語では「木のテーブル」という1通りの方法のみになるが(下図9参照), 中国語では「的」の有無に関する2通りの方法があり、「木头+桌子」, 「木头的桌子」という形になる(下図10, 11参照)。

日本語ではこの段階で「木のテーブル」という描写形式が決定するが、中国語では、「木头+桌子」「木头的桌子」のどちらにするかは、次の「言語」の段階を待たねばならない。

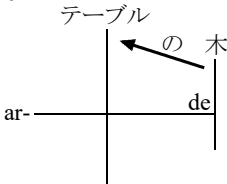


図9 木のテーブル

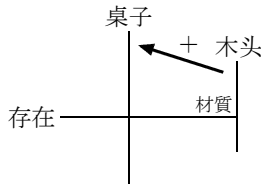


図10 木头+桌子

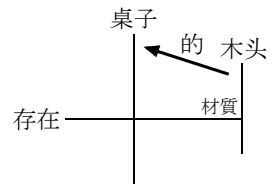


図11 木头的桌子

[6] [言語]の段階

日本語の場合は、[概念③]の段階で「木のテーブル」という表現が確定するが、中国語の場合は、[概念③]の段階では、「木头桌子」という表現にするか、「木头的桌子」という表現にするかは確定しない。これが確定するには別の要素が必要である。

つまり、日本語の「の」の使用は「前言語」の段階で決まるが、中国語の「的」の使用・不使用はこの段階では決まらず、次の段階の「言語」の段階で決まる、といえる。……日本語の「の」と、中国語の「的」の違いは、このような相違として捉えられる。

ここで2つのことが問題となる。

- ・中国語の「的」は何を表すのか。(「の」との違い)
- ・中国語の「的」の使用・不使用の違いは何か。

次にこの2つの問題について述べる。

3 日本語の「の」と中国語の「的」

3.1 対応する場合

日本語の「の」は、日本語構造伝達文法で下図のように表されている(『日本語のしくみ(1)』p.19)。実体が2つ構造上にあるが、このことは、実体間に論理関係の存在することを意味する。「AのB」という形で、構造上にある2つの実体を結ぶ。表現「AのB」の意味は構造上の論理関係から生まれ、「の」そのものに「所有」等の意味はない。

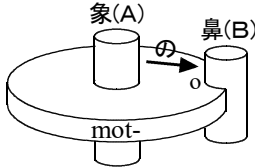


図12 象の鼻

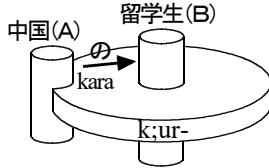


図13 中国の留学生

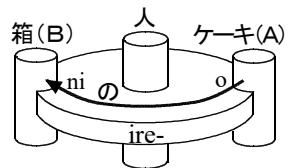


図14 ケーキの箱

中国語の「的」も機能は同じであると考えられ、構造上の2つの名詞をつなぐ。それで、多くの日本語の「N+の+N」の表現は、中国語の「N+的+N」の表現に翻訳される。逆も同じである。

3.2 対応しない場合

しかし、「の」と「的」はまったく同じものではない。それで、「N+の+N」と「N+的+N」が対応しない場合がある。

[1] 「の」は使えるが、「的」は使えない ……「的」は同一の範疇にあるものをつなぐ

「日本語の先生」は言えるが、「*日語的老师」とは言えない。

「日本語」と「先生」は異なる範疇に属する。つまり、「日本語」は「学科」の範疇に属し、「先生」は「人間」の範疇に属する。「学科」の範疇と「人間」の範疇には直接的な関係がない。このように、範疇が異なる場合には、「的」でつなぐことができない。

もし、「日語」(日本語)が「日語組」(「日本語組」となったとすれば、「的」が使えるようになる。

「日語组的老师」(「日本語組の先生」)

その理由は、「日本語組」(特に「組」)は人間を含んでいるので人間の範疇に属し、「先生」も人間の範疇に属するので、2つの語の範疇に共通性があるようになるからである。

もし、「日本語組」あるいは「先生」を強調する必要があるれば、「的」を使う必要がある(日語组的老师)(次の4章参照)。「的」がなければ、強調される部分がないことになる(「日語组老师」)。

[2] 「的」は使えるが、「の」は多義になる ……「的」は非同格関係をつなぐ

また、「的」は使えるが、「の」は多義になってしまう、という場合もある。

「医生的父亲」……「医者のもつ父親」の意味

日本語の「医者の父親」は、「医者である父親」の意味も持ち、多義になっている。

「的」は重点化の機能を持つので、2つの名詞が同格の関係にあるときは使用できない。それで、「医生」と「父亲」が同一存在であるこの文では「的」が使用できないのである(次の4章参照)。

4 「的」は重点のあることを示す

4.1 「木头的桌子」(「N+的+N」)の重点

日本語の「N+の+N」という表現は、中国語では「N+的+N」と「N+N」の2つの表現のどちらかになる。では、中国語の「N+的+N」と「N+N」の2つの表現には、どのような違いがあるのか、また、「的」は構造描写にどのような影響を与えるのか。これについて、次の[1]～[3]で考察する。

[1] 「N+N」重点がない場合

- | | | |
|----|-------------------------|---------------------------|
| 例1 | A: 这是什么? | A: これは何ですか。 |
| | B1: 这是 <u>木头桌子</u> 。 | B1: これは <u>木のテーブル</u> です。 |
| | B2: ? 这是 <u>木头的桌子</u> 。 | B2: これは <u>木のテーブル</u> です。 |

例1のように、事物そのものは何か、と質問する文脈では、「木头桌子」で答えることのほうが、「木头的桌子」で答えることよりよい。

「これは何か」のように、客観世界の存在物について問うときは、重点がないとみなせるので、「的」がないほうがよい。この時、もし「的」をつけて、「木头的桌子」と答えれば、何か余分に答えているという印象になる。

日本語の場合は、「木のテーブル」と言っても、中国語のように何か余分に答えているという感じはしない。「*木テーブル」という言い方がないからである。

[2] 「的」のあとに重点がある

- | | | |
|----|-------------------------------------|--|
| 例2 | A: 你想用这块木头 做个什么送给她? | A: あなたはこの木で彼女に 何を作ってあげますか。 |
| | B1: 我想用这块木头 做张木头桌子送给她。 | B1: 私はこの木で彼女に <u>木のテーブル</u> を作ってあげます。 |
| | B2: 我想用这块木头 做张 <u>木头的桌子</u> 送给她。 | B2: 私はこの木で彼女に <u>木のテーブル</u> を作ってあげます。 |

例2のように、材質としての「木」を、その用途について問うときは、「木头的桌子」で答えるほうが、「木头桌子」で答えるよりよい。

問いは「木」の用途を聞くのであるから、「的」が入ることによって、「木」の用途が重点化されるからである。

作られるのは「テーブル」であって、「椅子」などではないという気持ちを伝えることができる。もし、的を入れず、「木头桌子」と答えたとすれば、「桌子」は重点化されない。

日本語では「木のテーブル」となる。

[3] 「的」のまえに重点がある

- 例3 A: 这张桌子的材质是什么? A: このテーブルの材質は何ですか。
 B1: ? 木头桌子。 B1: これは木のテーブルです。
 B2: 木头的(桌子)。 B2: これは木のテーブルです。

例3のように、「テーブル」の材質を問う場合にも、「木头的桌子」を使う。その時の「的」は「木」の用途を重点化するわけではなく、「テーブル」の材質を重点化するのである。「木」であり、「プラスチック」などではないという意味を伝える。

日本語では、やはり「木のテーブル」となる。

[4] 中国語では、「的」が重点のあることを示す

以上に見るように、中国語では「的」によって重点化がなされると考えられる。[2]の「木头的桌子」では「桌子」が重点化されており、[3]の「木头的桌子」では「木头」が重点化されている。

重点化を表現する方法は中国語と日本語で異なっている。中国語では、「的」で表現する。重点化がない場合には「的」を使わない。「的」を使えば、文脈がなくても、「的」の前か後かを重点化している可能性がある。その可能性がはっきりするのは「言語」の段階、文脈である。つまり、「的」を使用するかどうかは、「言語」の段階で決まる。

[5] 日本語の「の」は重点のあることを示さない

日本語では、このような区別を「の」がすることはしない。上のそれぞれの場合で、一様に「木のテーブル」となる。重点化が表現されるとすれば、それは、重点化部分の強い音調や、非重点化部分の省略など、「の」の使用・不使用とは別の方法になる。

[6] 文脈との関係

日本語の「木のテーブル」は3つの文脈で使えるが、中国語の「木头桌子」と「木头的桌子」は使える文脈が異なる。中国語の「N+的+N」の重点化の機能は文脈を離れても生きる、といえる。文脈の役割は、重点化されるのが前の「N」であるか、後ろの「N」であるかを定めることである。日本語の「N+の+N」の場合は、形式の上での重点化はない。「の」そのものは重点化の機能を持たないといえる。

[7] 表で示す

表1 「の」と「的」の対比 ……重点の有無

| 日本語 | 中国語 | | |
|----------------------------|-----------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| <p>「N+の+N」 重点の有無なし</p> | <p>「N+N」 重点なし</p> | <p>「N+的+N」 前のNに重点あり</p> | <p>「N+的+N」 後のNに重点あり</p> |

この表1から分かるように、重点の有無という視点において、日本語の「N + の + N」は、中国語の「N + 的 + N」だけでなく、「N + N」と対応する場合がある。それで、日本語の「N + の + N」と中国語の「N + 的 + N」は、1対1に対応するとはいえない。

中国語では、「的」があれば、その前か後の部分が重点化されるという原則があると考えられる。以下の例でも同様に考えられる。

「田中さんの服」……「田中衣服」と「田中の衣服」に対応。

「四川の料理」……「四川菜」と「四川的菜」に対応。

「火山の噴火」……「火山噴火」と「火山的噴火」に対応。

もちろん、中国語で「的」が必須の場合もある。が、それは本論文で扱う範囲を超えている。

5 まとめ……「の」と「的」の類似と相違

日本語の「N + の + N」と中国語の「N + 的 + N」を対照して、対応、非対応の場合を考察した。その結果、日本語の「の」と中国語の「的」は、基本的には同じであっても、異なる性質もあることが判明した。

類似点：

構造上にある2つの名詞をつなぐ。

相違点：

日本語の「の」：

- 1 概念③の段階で使用が決まる。
- 2 「の」そのものの存在は「N + の + N」の表現に必然的に存在するものであって、重点化とは関係がない。

中国語の「的」：

- 1 概念③の段階ではなく、そのあとの言語の段階で、使用・不使用が決まる。
- 2 「N + 的 + N」において、重点化されるのが前のNであるのか、後ろのNであるのかは、文脈が決定する。
- 3 2つのNが同格関係である場合は、「的」でつなぐことができない。また、2つのNが異なる範疇に属する場合も、つなぐことができない。

本論文では、客観世界での存在物を認知した後と、言語記号として言い出す前の前言語構造と、言語表現の諸段階において、日本語の「N + の + N」と中国語の「N + 的 + N」、「N + N」について考察した。日本語の「の」と中国語の「的」についてのこの研究が、学習者の理解を深める一助となれば幸いに思う。

参考文献

今泉喜一（2003）『日本語構造伝達文法』（発展A）揺籃社

- 今泉喜一 (2012) 『日本語構造伝達文法』(改訂12年版) 揺籃社
 今泉喜一 (2015) 『日本語のしくみ(1)』 揺籃社
 大島資生 (2010) 『日本語連体修飾構造の研究』 ひつじ書房
 辛奕羸 (2013) 「認知言語学の観点から見た中国語“的”の意味変化と文法化」『大学院論文集』第10号 (杏林大学)
 Neisser (1976) *Cognitive Psychology* Appleton-Century-Crofts
 Treisman, A., & Gelade, G., (1980) “ A feature integration theory of attention ”. *Cognitive Psychology*, 12
 完权 (2016) 《“的”的性质与功能》 商务印书馆
 徐阳春 (2006) 《虚词“的”及其相关问题研究》 社会科学出版社
 赵艳芳 (2000) 《认知语言学概论》 外海外语教育出版社
 (齐鲁工业大学外国語学院・辛奕羸)

研究者紹介 辛奕羸 Xin Yiyin

略歴: 1982年 中国遼寧省営口市生まれ
 2009年 中国四川師範大学 修士 (文学)
 2014年 杏林大学 博士 (学術)
 2014年～2020年 浙江工業大学外国語学院 講師
 2018年～2019年 杏林大学 ポスト・ドクター
 2020年より 齐鲁工業大学外国語学院 講師

日本語構造伝達文法との関わり: 日本語構造伝達文法は認知言語学の一部であると考えている。私の研究は主に認知言語学の方法に依拠しているので、人間が客観世界で事象を見たのちにそれを言語にする過程を認知プロセスとして考察している。日本語構造伝達文法の構造図は、脳内で、抽象的な概念が具体化して論理関係の中に存在することを表すモデルなので、これを参考にすれば、概念の記憶形式を明らかにできるのではないかと考えている。

今回の論文について: 連体修飾をする「の」の意味は、「の」そのものの意味ではなく、つながれる二つの名詞間にある論理関係の生じる意味である。中国語の「的」は「の」に似ているが、同じではない。「の」と「的」の類似点と相違点はどこにあるのか。それを明らかにするために、認知的な研究方法により考察した。

今後の研究予定: 引き続き認知という視点から、日本語の「の」と中国語の「的」二者のもつ意味を明らかにする。両者を個別に研究することも重要と考える。

メールアドレス: yiyin-xin@qq.com

文法ホームページの突然の消滅……更新

文法ホームページの突然の消滅

日本語構造伝達文法のホームページが突然消滅した。サーバーの提供会社の都合によるものだが、ユーザーである私の方へは何の連絡もなかった。したがって、まったく突然のことだった。(しかるべきところには掲示があったようだが。)

文法ホームページを見てくださる方からも連絡をいただいた。

しかし、これは、ホームページを作り変える絶好の機会かもしれない。

新ホームページ

① すべての本の掲載

まず、これまで出した本を全部掲載して、読めるようにする。

このホームページの目的は、「日本語構造伝達文法」の理論の紹介である。旧ホームページでは、この目的のために、『日本語構造伝達文法』の本2冊と、大学院での、アニメーション活用のパワーポイント教材、並びに「不思議ノート」等を載せていた。

しかし、このよい機会に、これまでに出版したすべての著作を掲載し、サイトへの訪問者に読んでいただくことにする。いまの人は、すべてネットですませようとする傾向があるので、理論を知っていただくには、それが一番よいようである。中国語版、韓国語版も載せよう。

② 大学院教材をどうする？

旧ホームページに載せていた大学院の教材はどうしたらよいだろうか。載せれば、見てくださる方の理解の助けになるかも知れないから、やはり載せるべきか。載せる方向で検討するつもりである。

③ 研究会の案内

研究会は、月1回、八王子で開いているが、この案内は引き続き掲載するのがよいだろう。これまでも、この理論に関心を持ってくださった方が何人か、八王子という不便なところまでおいでくださった。

④ 日本語構造伝達文法の歌

これまで4曲の「日本語構造伝達文法の歌」を作詞・作曲して、『日本語のしくみ』の(2)～(5)に楽譜を載せてきた。どんな歌か知りたいという声もあったので、素人ではあるが、私が歌うことにした。(へたなところは、ご愛嬌ということで、お許し願いたい。)演奏のみのものも載せるつもりである。

このホームページは2021年4月ごろには開始できるだろう。しかし、私自身が明日をも知れない年齢だから、今度はそれが理由で、突然なくなるだろう。